

Title	天野元之助著 中国農業史研究
Sub Title	The study on the agricultural history in China, by Motonosuke Amano
Author	平野, 絢子
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.12 (1962. 12) ,p.1123(79)- 1127(83)
JaLC DOI	10.14991/001.19621201-0079
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19621201-0079">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19621201-0079</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

(33) サンシモン『新キリスト教』における提案も多分に労資協同的である。

「私たちは私たちがイエスの社会という名称をそれにあたえるであらう。ところのあたらしい宗教的秩序を設立するであらう。この社会はキリスト教の教義に正反対の教義を立てるであらう。それは神の見地から富者や強者の利益を貧者の利益よりも優勢にさせることを引受けるであらう。」(Saint-Simon, idem, p. 47. 本文イタリック)

「私はまず第一に、富者や強者をしてあたらしい学説がけつして彼等の利益に反しない、なぜならば富者階級の享楽の増加に向う方法以外のものによつては貧者階級の肉体的存在を改善することがあきらかに不可能であるからである、ということとをさとらせることによつて新しい学説に対して富者や強者にこころよく心がまえをさせるために彼等にはなしかけねばならない。」

私は芸術家、学者、産業的労働の指導者の利益が本質的に人民大衆の利益と同一であるということ、彼等が労働者階級に属するということ、同時に彼等が本来的指導者であるということ、彼等が人民大衆にはたす奉仕にたいする人民大衆の称讃は彼等のががやかしい仕事の唯一の当然の報酬であるということとを彼等にさとらせねばならない。」(pp. 90—91.)

(34) God and Man a Unity, p. 65. 傍点引用者。

(35) Ibid. p. 67. 傍点引用者。

(36) Ibid. p. 80. 傍点引用者。

(37) また第四部においてはつぎのようにのべられている。「労働との公正な協同およびすべての競争の破壊における以外どこで救済策が見出されるべきか？」(Ibid. p. 94. 傍点引用者。)

(38) Ibid. p. 68.

(39) Ibid.

(40) フォイエルバハのべている。「汎神論は神学、神学の立場における否定である。」(L. Feuerbach, Vorläufige Thesen zur Reform der Philosophie, 1843. Samtliche Werke, Bd. II, 1904, S. 224. 植村晋六訳、七頁。)

(41) God and Man a Unity, p. 70—75.

(42) Ibid. pp. 87—88.

(43) Ibid. pp. 91—93.

(44) Ibid. p. 95.

〔追記〕本研究は昭和三十七年度文部省科学研究費交付金(各個研究)による研究成果の一部である。

書評

天野元之助著

『中国農業史研究』

平野 絢子

農業問題は現在国際的に一つの大きな課題として現われつつある。英、独、仏、埃其他の農業基本法の成立、E・E・Cの農業問題、又今春のモスクワでのフルンチョフ報告によるソビエト農業の行づまり、中国における農業生産停滞による公社経済の是非をかけた発展の足ぶみ、我が国でも農業基本法の成立を契機に日本経済の高度成長にまきこまれて、激変してゆく農村の再編成・二重構造打開論等。この期に当って神谷慶治氏によれば「中国農業史というよりは『世界史に於ける農業の地位』とでもいうべき」(本書序文九〇〇頁)に及ぶ大著「中国農業史研究」が上梓されたことはまことに大きな意義をもつと言わなければならない。いうまでもなく農業は人間の生活に欠くことの出来ない食糧、衣服の原料生産という、財の生産の根源的位置を占めてはいるものの、資本主義経済の高度の発展の中ではその主導的役割をになつた工業の絢爛たる資本設

備・技術革新の上げ潮を孤島のように見守る他はなく、そのままそれぞれ各国の現在直面する「農業問題」をはらんで今日に至つたのである。その「農業問題」の本質は資本主義国、社会主義国を問わずいずれにしても消費財生産の一方の雄としての農業生産が、工業における労働生産性のテムポよりはるかにおくれる構造的特質に基づくことから生ずる諸問題(農産物価格其他)をめぐるものであることは明らかであり、その点こそ農林省農業総合研究所で各国農業発展の再検討・分析を通じて「将来の日本の農業の今後の発展に対する生きた教訓」として各国農業史研究計画がたてられた所以がある。本書は天野博士独自の御研究であるが、この点からその一環として農綜研の委託研究として懇請されたことである。

ところで本書は、さきに「支那農業経済論」上・中巻、その下巻に相当する「中国農業の諸問題」上・下巻を刊行された天野元之助博士が「後半生をかけた」といわれる、経済学的方法論に支えられた中国農業生産の最も具体的・体系的検証である。第一編作物編の第一章黍・稗・粟・梁考、第二章麦考、第三章稻考、第四章中国の養蚕考、第二編栽培編の第一章水稻作技術の展開、第二章棉作の展開、第三編農具編の第一章青銅製農具考、第二章スキの発達、第三章ウスの発達、より成る本書は股以前より秦・漢を経て唐・宋・元・明・清・民国から現共和国に及ぶ長い時期の農書にもとづく豊富適確な検証にとどまらず、労働対象としての種子の品質改良、農具の発達、又土地所有、経営様式、農業構造のメカニズムとそれらの発展・停滞との関係の経済学的分析が相俟つて賛歎すべき成果を

織りなしている。それは「孟子」「荀子」「管子」などが伝える手  
 労働による個別的零細経営への移行」が、「鉄製農具の出現による深  
 耕、除草、刈りとりにおける労働生産性の上昇、単位面積収量の増  
 大」を背景に行われたことを知らしめると同時に、「従来一畝八・  
 九千株だった稲が合作化後一九五八年には三・五万株の密植を行う  
 が、日本のように分蘖しない主穂数の増大で増産が行われた」こと  
 をよく理解させるといふ具合なのである。

老大な古農書の選捨、定本の作成、マイクロフィルム絵図による  
 確認等に支えられ、「支那農業経済論」他の諸論稿と表裏一体をな  
 す。在来農法の説明は又、新共和国確立後の、経済の社会主義化の過  
 程でのみ変革・導入されうる新農法、新農具をうきほりにする。農  
 業経済の研究者、又社会主義農業のメカニズムを中国経済の社会主  
 義的改造過程の中からあつづけようとする者にとつて、殊に水田稲  
 作技術と他耕種との結合がそのメカニズムの中で如何様に作用する  
 かに関心を持つ者にとつて、本書の上梓はまさに天からの恵みの如  
 く貴重な贈りものと言わなければならないであろう。

二

本書の引用文は神谷教授が指摘されるように「遠く殷墟の甲骨文  
 字から現代の人民公社資料」(序文)に及び、書評などとおこがまし  
 く云々するところではないが、それなりの立場から大変参考とさせ  
 ていただいた点を二、三列記してみたい。

辛亥革命以後の中国民族資本の興隆と半植民地化の浸透の間か

水稲良種の普及を五八年には八一・九%、五九年には九〇%にまで  
 もちこんだ(四四七頁)ことは、その良種の再検討が取上げられる  
 (「中央公論」一九六二年三月号石川滋氏)にせよ、極めて特筆される  
 べき変化である。肥料について緑肥・河泥・人畜糞・灰などの自給  
 肥料の様式と数量、金肥の歴史と分布図なども興味あるところであ  
 る。合作化後も化学肥料生産の絶対的過小が一方では公社内自給機  
 構の確立へ、他方では従来の自然肥料をフルに生産利用するために  
 如何様に豚が飼育され、池泥がさらわれたかが明瞭である。一九四  
 〇年代の抗日内乱期に「無肥料水準」(山田盛太郎氏)が更に  
 ひき下げられ粗放化したか、従って水田小農民経営下の生産量増大  
 のメカニズムの中でしめる肥料投下による生産物量増大部分割合の  
 大きいことを描くとしても、この超無肥料水準(たとえば史敬業他  
 「農業合作化運動史料」上冊にみられるような)を前提とすれば有効  
 肥料の投下がいかに生産高を大幅にひき上げうるかという点を相当  
 考慮にいれねばならないであろう。すなわちこの大躍進の折には化  
 学肥料は生産不足で一畝当り一斤にも達していないから、「主要肥  
 料としては在来の有機質肥料で一畝当り従来の二千ないし三千斤を  
 一万斤・五万斤・十万斤と施して、空前の豊収をあげたが、追肥と  
 しては農村における土化肥三〇〇万による土化肥一億トンをも使  
 用した」(四三五頁)といわれる。すなわちこの段階においてもまだ  
 草肥、養豚積肥、緑肥が基本的でそのために農業生産に用いられる  
 労働力の四〇%も投下されていることの指摘、又田植の時苗の根を  
 各種肥料の配合液につける、というような労働対象をめぐる技術改

ら、官吏・地主・商人の三位一体のメカニズムを抽出し、論理的に  
 整理し、一九四〇年代以降の社会主義革命への傾斜とエネルギーを  
 農村構造からさぐる者とする者は誰しも、所謂稲作の北限、別言で  
 いえば北部小麦地帯と南部水田地帯の自然的諸条件の社会科学の処  
 理を通過しなくてはならない。周知のようにそれに対してはバック  
 の「Land Utilization in China」があり、小麦地帯と水田地帯の地主  
 的土地所有の存在形態、小作化率、富農の形成と性格などは天野博  
 士の名著「支那農業経済論」他で学ぶことが出来るが、本書は富農  
 と貧農の生産技術上の相違、又その経済的見地よりの理由の解明な  
 どが与えられることで、定式化されがちな一九二〇年代後半の農民  
 層分解を具体的に理解する大きな助けを与えてくれる。たとえば本  
 書は水稲の種類、それぞれの栽培の理由、田植と直播、苗代の様式  
 を地域別に説明された中で、浸種催芽をやれば苗代日数が一カ月で  
 すむ(当然収量は十<sup>1)</sup>である)が、しなければ一カ月半かかる。二〇畝<sup>1)</sup>  
 (大体大雑把にいうと農家経済再生産確立限界線)以下の貧農は、田植  
 適期に自ら日傭いとなって労働力販売を行わざるをえないために強  
 いて浸種催芽をやらず苗代日数をひきのばすなど。籾と稗の一代雑  
 種。単位面積当り種粒の播種量の解放前後の大きな相違は後の密植  
 栽培を考える上に中国独自の方式として重要であろう。又解放後  
 においては、在来種の中から優良品種を選び出し、それを同一の環境  
 地帯にひろめる「種子站」(種子ステーション)が実現し、耐肥性で  
 倒伏せず収量が高いが生長期間の長い品種と生長期間の短い品種と  
 を並存させつつ、一九五二年に栽培面積の五・四%にすぎなかった

良が地域の特殊性としていくつか示されるなど現中国農業生産力の  
 様相がよく示されている。

八字憲法内における旧新農法の比較は灌漑の普及、肥料作成の計  
 画的組織的実現などにも勿論大きくあらわれているが特に強調すべ  
 きは集団的企業の成立による労働の組織化、(協業化、分業化をふく  
 む)とそれによる生産様式の変化であろう。一企業に初級社平均三  
 〇戸として六十人余、高級社一五〇戸として三〇〇人余の労働力が、  
 それぞれ生産隊に分岐してはいるものの計画的配分投下しうるとす  
 れば、当然豊産田にみられるような労働力を余計に投下して単位面  
 積収量をあげようとする「保」||作物保護が「密」||密植・「肥」  
 と結びついて行われうる。農業製造と相俟って北のバッタ、南のウ  
 ンカも当然のこととして消滅、収量の増大を導くことである。従来  
 八字憲法については現地においても我が国においてもいろいろと書  
 かれたが、本書の何よりの強みは、たえず過去の各代にわたる農法  
 との比較を通じて、何が、どのようにその相互に関連しているこの  
 極めて中国的な「農業生産力」を高める様式を形成、実現しえたか  
 を行間に語るところにある。たとえば挿秧機(田植機)を一つとっ  
 ても、稲の苗を機械で植え稲作労働の宿命といわれた田植時の労働  
 のピークを緩和しようというこの画期的実施を一つの問題としてき  
 りはなし、人民日報紙上にその生産実施がみえなくなったから失敗  
 であろう(アジア政経学会、尾上悦三氏報告)というような「視角」  
 から我々を救ってくれる。七種の挿秧機の図解やその使用推広上の  
 解明もさりながら、我々は一つの機械の出現が決して社会経済的背

景をもたず現われることもなく、又その技術的失敗が(たとえあつたとしても)決してその出現をけしざるものでもないことを十分にここから読みとりうるからである。機械田植の方が成熟が早く、根の分布が長く大きいとあれば更にどうであろうか。更に農法とは独立した編である農具編における手労働による農具の発達を、文明の一発祥地である中国の青銅期から現代に至るあつけ、とくにすきの発達——作条犁より耕犁へ——と、農業の機械化、電化に新しい道を拓くものとしての深耕犁の項は、日本のそれとも比較し、極めて貴重な研究であろう。戦国時に最初に牛耕具が使用されて以来、一九五八年に「広西省柳城機械犁で創製された『自動移行深耕犁』は並立式畜力牽引機を用い、人の扶けを必要とせず、自動的に運行し、深度は三〇センチにも達する」に至るまでを我々は知ることが出来るのである。ことに本書のすでに述べた特質は「農業史上より

みたスキの役割」の節で、「スキの発達が当時の農業経営、ひいては其の生産関係にどういった作用をひき起したかを検討する」ところに見事に現われている。長床犁の形成と二牛以上の畜力を必要とした耕作技術を実現できる経営形態は、それを実現しうる自然的地理的条件(たとえば華北の畑作地帯)をふまえて適確にかまえられる。そして中国では「農業生産を左右すると言われる耕犁も、ほとんど何らの変化もなく、従ってはその生産力の飛躍的展開を見せるほどの事態も解放前まで農業面に現われず、社会経済の漸進的発展は農業経営の労働集約化、低級作物の高級作物への編成替え、在来農業技術の改善といった方向で土地生産力の増高を促進し、その間

生産力と生産関係の矛盾も、多く王朝末期の農民一揆に端を発する危機的現象として爆発をみても来たものの、解放前までは、社会変革といった深刻な事態にまで達せずに、長く封建的な生産関係を再編成するにとどまって来た」(八三六頁)のだということになる。すなわち、現在の、在来犁より二・六倍も効率が高いとされている双輪双犁・双輪單犁が、十條播種機、收穫期、ハロー、鎮圧機等とセットとして生産過程に入り、農業生産力を飛躍的に高めるテコとしての役割を果たすためには、農業でつくりだした価値を農業生産外に投下流出させるような半封建的関係と零細経営の払拭、社会主義的再生産構造の一点としての集団的農業企業の成立が不可欠の前提であった。

## 三

本書では水稲技術の十分な検討の外に大きな部分が棉作技術にも割かれている。地域別の播種から收穫までの様々な方法、更に在来農法に対する解放後の様式として、深耕の深さ、播種期の引上げ、密植、棉田の灌漑、整枝、棉作と麦作の組合せ、脱落防止措置などの克明な説明により、四・七倍という生産量の飛躍的増大の背景をしるしておられる。いずれにしても、我々は統計数字の総生産量増大、単位面積当り収量増大の最も具体的な様相を知り、その現実さぐり入ることが出来るわけである。

最後に筆者はここ二三年、一九二〇年―三〇年代における中国農村の農民層分解と半封建的半植民地的経済機構の中で作用し規定さ

れた旧中国農業がいかにして社会主義経済への移行の母体となり、更に新中国経済の社会主義的再生産構造の中でその農業の後進性がいかなる形で社会主義経済に持ちこまれ、その中で脱皮しようとしているかを追求して来たのであるが、その途次いつも行きつまるのは直接的生産過程における使用価値視点からの農業生産力構造の内実に対する文献についてであった。筆者の寡聞によることとして

も、本書は筆者にとって限りなく有難い賜りものであって、爾後博士が御上京の折、或いは学会のあとで余分な質問でおわずらわせずることなくこの汲めどもつきぬ泉を汲むことの出来る喜びを深く味わっているのである。

(お茶の水書房、A5、本文九一八頁・索引一六頁、四五〇〇円)